

(※673)

【解説】

甚四郎から妻お峯への手紙で、甚四郎が渡米した明治二十五年（一八九二）のものともみられます。甚四郎は同郷の本田鶴吉のもとに寄宿し、その後「けわん」（未詳）で仕事を始めました。一日の賃金が一円であることや、朝五時から日の入りまで暑く、時には華氏一一〇度（摂氏約四八度）になるなか働き、寝起きする場所も「うししべや」（牛小屋）のようだと過酷な様子が書かれています。

「本田子」(鶴吉の子鶴之助)は英語が話せるので自分よりも評判が良いとあり、英語が話せることより良い環境で働くことができたのでしゅい。

渡米前の横浜滞在時に西亀之助へ送金したことも記しています。亀之助は紀三井寺村における移民の先駆者で、甚四郎は何か世話になったと思われ、送金はそれに関するものと考えられます。

お峯と子供たちへは、その身を案じる言葉として自分は一日一円稼ぎ、年間一七〇〜八〇円ほど稼げるので安心してほしいと伝えていきます。大

阪で働く長男の敏郎には、大阪で（商売の）勉強を
をして稼ぐよう伝えてほしい、と書いてあります。